

私は、壁にぶつかっていた。

連載中のTL漫画。初めて描くことになった3Pの濡れ場。ヒロインを男性二人が前後から挟む構図なのだが、腕の位置や脚の重なり方、身体の厚みの差が、どうしてもうまく描けない。資料を探しても、ちょうどいい角度のものが見つからない。その間にも、締切だけが着実に迫ってくる。

(誰かに頼むしかないかも……)

私はタブレットを閉じ、天井を仰いだ。部屋に散らばった原稿用紙と、空になったコーヒークップが視界に入る。

空輝と発彦のことを思い浮かべたのは、そのときだ。

大学時代からの男友達二人。卒業後も三人でごはんを食べたり、私の家に遊びに来たりする、気心の知れた仲だ。

二人とも私の職業は知っているし、協力してくれるかもしれない。私はスマホを手に取り、グループ

LINEにメッセージを送った。

『今週末、ちょっと頼みたいことがあって。漫画の資料でポーズ撮影させてほしいんだけど、二人とも来られる？』

返信はすぐに来た。

『え、何それ気になる笑 行く行く』

『行く』

——そして当日。

「よー、帆乃香。ポーズ撮影ってどんな感じ？」

部屋に入るなり空輝がそう言って笑い、発彦はその後ろから作業部屋を見渡した。原稿の束とデッサン人形、付箋だらけのネームが机いっぱい広がっている。

「ありがとう、助かる。えっと、これなんだけど」

私はタブレットを差し出した。表示されているのは、問題の3Pシーンを描いたネームだ。二人が画面を覗き込み、一瞬の間があった。

「……なるほどね」

「ああ」

空輝はにやっと笑い、発彦は短く頷いた。私は二人の反応を確認してから、できるだけ事務的な声を出した。

「服は着たままでいいから。腕の位置とか、身体の重なり具合とかを確認したくて。男性側のポーズだけ撮れればいいの」

「分かった。どこでやる？」

発彦の問いに、私は床へ敷いたマットを指差した。二人は頷き、マットの前に立った。

——しかし、すぐに問題が発生した。

「これ、俺らだけじゃ無理じゃない？」

空輝がネームを見ながら言う。ヒロインが前後の男性に挟まれている構図で、身長差もある。腕の回し方も、胸への手の置き方も、間に女性の身体がなければまったく再現できない。

試しにクッションを二人の間へ挟んでみたが、薄すぎて意味がなかった。デッサン人形も使ってみたものの、スケールが違いすぎる。

空輝は笑いながらタブレットと二人の不格好な姿勢を見比べ、言った。

「帆乃香が女役をやればいいじゃん」

「……え？」

「そのほうが、腕の位置まで正確に分かるだろ」

発彦が当然のここのように続ける。

「いや、でも、私は撮影する側だし……」

「タイマーを使えばいいじゃん。タブレットを固定しておけば、帆乃香も一緒に入れるでしょ」

「そういう問題じゃなくて……」

「服は着たままでいいんだろ？」

「それは、そうだけど……」

「帆乃香が入らないと、腕の位置も脚の重なり方も分からない。今のまま撮っても資料にならないぞ」

発彦に言われ、私は返す言葉に詰まった。

確かに、クッションを挟んだ二人の姿は、ネームの構図とはほど遠かった。このまま角度を変えて撮り続けても、欲しい資料にはならないだろう。

「でも、そこまでしなくても……もう少しクッションの位置を変えれば、なんとかなるかもしれないし」

「じゃあ、もう一回やってみる？」

空輝がクッションを抱え直し、二人の間へ縦に挟んだ。発彦もネームに合わせて腕を伸ばしたが、や